

関西版

日本列島情報ネット

〒550-0044
大阪市西区鞆本町
1丁目15-10(森田ビル)
電話・06(6445)6935
FAX・06(6445)6938

線鉄めっき亜鉛被覆R-I 基礎育成ナギウホンの活用

実験実証へ販拡 トワロン

被覆線メーカーのトワロン(本社・大阪府堺市、社長・藤本和隆氏)は、日建工学、かごまつ工法技術推進協会と共同開発したニホンウナギの生態系を守る「うな住」写真IIの拡販に向け、実証実験や多方面へのPRを積極的に行っている。

「うな住」は、トワロン製のI-R被覆亜鉛めっき鉄線(心線はめっき線、被覆厚0.5mm)を用いた強化かごマットと、藻類の生長を促し、ニホンウナギの餌となる甲殻類を導く効果が確認されているアミノ酸入りプロック「うなパネル」と、ニホンウナギが住み着くための鋼製被覆コイル「うなコイル」によって構成されている。用途は、保護育成礁、根固工、魚道工、護岸工、護床工。

「うな住」に用いられている被覆鉄線は、ダークブラウンで、明度が低く、エイシングにだけなく海域の環境より線材自体に藻が付着し、生き物に優しい仕様の。また、I-R被覆亜鉛めっき鉄線は、塩分濃度が高い区間で30年程度の耐久性を有する程度と判断され、建設技術と判断され、建設技術審査証明を取得しているなど、優れた性能を持つ。そのため、河川だけでなく海域の環境にニホンウナギが生息した結果なども得ている。藤本社長は「ニホンウナギの漁業生産量は年間70万トン程度と、ピーク時に比べ、2%近くまで落ち込んでいけるニホンウナギの生息環境」とし、「ニホンウナギの生態系を守るべく、優位性のある実証実験をもとに、生息地域への販拡を目指す」と話す。



四国

ひと

神鋼建材工業 四国営業所長に就任した 谷 鉄也氏



5月1日付けで北海道支古くからの顔なじみも多し、12年ぶりに高松に戻った。地元だけに土地勘や、

5月1日付けで北海道支古くからの顔なじみも多し、12年ぶりに高松に戻った。地元だけに土地勘や、

「至誠天に通ず」を座右の銘に、各地の勤務先でも、同社もガードレール・フェンス、中央分離帯用ワイヤロープ式防護柵など道路製品、落石防止柵・網やケブルネットなど防災・減災製品を多数品そろえて

5月1日付けで北海道支古くからの顔なじみも多し、12年ぶりに高松に戻った。地元だけに土地勘や、

チームワーク営業で増収へ

とで課題が見つかり、それおり、「同居している神戸を克服していくことで達成感を得られる。みんなで頑張ろう」とチームワーク営業を強化している。

四国では高速道路の新設・拡幅工事が継続的に行われているほか、国土強靱化計画に伴う防災・減災工事を

略歴

谷 鉄也氏(たに・てつや)1980年(昭55)神鋼建材工業入社。四国営業所、大阪支店、四国営業所勤務から2007年大阪支店担当課長、11年道路建材グループ長、12年名古屋支店長、16年東北支店長、17年北海道支店長から19年5月四国営業所長。62年(昭37)1月生まれ、57歳。香川県出身。

佐々木製罐工業の現状と展望

佐々木 正文社長に聞く



東京五輪関連向け需要の一巡やハイテンションボルト不足による中小工事の遅れで、鉄骨需要は全国的に停滞している。ただ先行きは、首都圏を中心とした再開案件や関西での万博、I-Rなど期待が持てる材料がある。

そこでプレスコラムメーカー、佐々木製罐工業の佐々木正文社長に足元の状況と今後の展望を聞いた。

関西でも大型物件が始動

来年初め 矯正機を更

「足元の生産状況 米中貿易摩擦による輸出環境の悪化などにより、大型の工場の建設中止や延期があったためだ」

「先行きの需要をどうに思ったので、結構な量のプレスコラムが出ると思う」

「東京に比べ大型物件た。その一方で、インバウンドの少なかった大阪でも、ウインドの増加で建設が相次ぎました。二期工事や中央次いだ中小のホテルは、郵便局跡地、淀屋橋の再開発など、適切な万博開催が